合わせ鏡のような二つの歌
―『蝉にたくして』と『伝える花』―
二階堂 和美さん

「あの日」への鎮魂歌
被爆80年の夏

昭和20年8月6日8時15分、一発の爆弾がすべてを破壊した。
広島のまちも、そこに暮らし働くひとびとも。
被爆80年の夏、「あの日」を思い、歌や語りに託す人がいる。
その人たちを訪ねてみることにした。

【取材　企画財政課】

二階堂和美（にかいどう・かずみ）シンガーソングライター・僧侶／元町）
ジャンルにとらわれない音楽性と、類いまれな歌唱・表現力で国内外から幅広く支持されている。スタジオジブリ映画『かぐや姫の物語』では主題歌の『いのちの記憶』を作詞・作曲。CM歌唱も多数。アルバム『二階堂和美のアルバム』『にじみ』『GOTTA-NI』ほか。著書に『負うて抱えて』『気になってるん！』など。令和６年から大好き大竹応援大使を務めている。

『蝉にたくして』が収録されたアルバム『にじみ』

『蝉にたくして』の動画はこちらから。

「8月6日にできた歌です」。そう二階堂さんが思い返すのが、今月号の表紙にある『蝉にたくして』という歌だ。

『大竹のヒロシマの日』として平和祈念式典が挙行される6日の朝、やかましいほどのセミの鳴き声が降り注ぐ。精一杯鳴くセミの声と原爆の日は、違和感なく重なる。

命の限り鳴く姿に、被爆で心身に大きな傷を負った人々の思いを託すような歌。二階堂和美さんが作詞・作曲をした『蝉にたくして』である。

あるとき新聞記者に「二階堂さんは、自作のヒロシマの歌はないの？」と尋ねられたが、そのときは「すみません」と答えるしかなかったという。その後、被爆65年の2010年の8月6日に、府中町の寺で催される『平和コンサート』に呼ばれることになり、広島のことを歌にできないかと思案した。

しかし、歌詞も途中までしかできず、サビにスッと入るメロディも出ない、モワッとした感じだったという。なかなか思うようにまとまらぬまま8月6日を迎えた。

コンサート会場に向かう途中、一緒にプレイしているピアノ奏者の黒瀬みどりさんの家で、最後の最後まで悩んでいたそうだ。

「みどりさんがサビのところで、私が思いつかないようなコードを弾いてくれました。それに誘導されるようにフッと歌メロが出てきたんです。よし、これにしよう」と、歌詞の譜割りを落とし込み、会場でリハーサルをする中で、ようやく完成。まさに8月6日が生んでくれた『蝉にたくして』だ。

「歌詞に〝光の中へ出ていった〟とありますが、あの朝、空襲警報が解除され、子どもたちもセミの声を聞きながら、光の中へと飛び出して行ったんだろうなと思います」。

セミが土の中から地上へ出て、声を上げて精一杯生きる姿。そして短い一生を終える。それと私たちの命のはかなさを重ねつつ作ったという。

昨年8月、ハワイのコナの広島県人会が行ったイベントで『蝉にたくして』の英語バージョンをオンラインで歌った。

「詩人のアーサー・ビナードさんが英訳をしてくれました。アーサーさんは、この歌をもっと広めるべき、きっとアメリカ人にも届くと思うと言ってくださいました。でも、コナにはセミはいないそうですね」とほほ笑む。

「セミは原爆の象徴的なものの一つ。歌を頼りに過去の出来事を少しでも想像し、自分ごととして感じてくれればと思います。この歌は自分が作ったというより、何かに作らせてもらったという感覚です。この歌ができたことで、一つ広島を背負ったような覚悟が生まれました」。二階堂さんは、少しはにかんだ表情を見せた。

原爆のことを思い作った歌が、もう一つある。それは『伝える花』。平和祈念式典のフィナーレ、参列者が慰霊碑に献花をするときに、静かに流れる歌だ。これは10年前に中国放送の被爆70年プロジェクト『未来へ』のテーマソングとして作られたものである。テーマの『未来へ』に沿って復興、希望を感じられる歌にしたいと思ったが、『蝉にたくして』で、出し切ったと感じていたので簡単にはいかなかったと二階堂さんは振り返る。

何かヒントになればと平和記念資料館を訪ねてみたところ、展示室の出口付近に1枚の写真があった。それが『焦土に咲いたカンナの花』というモノクロ写真だ。被爆1カ月後の9月下旬に、朝日新聞社の松本榮一さんが撮影したもので、がれきの中に咲き誇るカンナだった。

「アッ！これを歌にしようと思いました。資料館を出て、平和大通りの交差点に来たとき、できた！と詞とメロディが、いっぺんに浮かんできたんです」。

カンナの写真に触発されて生まれた『伝える花』。被爆にも耐えて花を咲かせる姿に生命力を感じるとともに、生き残った申し訳なさ、しかし生かされてしまったからには、未来に向かって生きていかなければならないという思いを込めたという。それは3年前に夫を亡くした悲しみから、歌で立ち直ろうとする二階堂さんの姿とも重なる。

『蝉にたくして』が悲しみを帯びた歌だとすれば、『伝える花』は希望の歌。この二つは合わせ鏡のように互いを映し出す鎮魂歌ではないだろうか。

「百を話しても伝わらないことが、歌だと伝わる気がします。自分自身、うそのない形で出せるのが歌です」。二階堂さんは、そう言葉を結んだ。

「つなげよう！未来へ」

被爆80年追悼イベントに思う。

大竹市原爆被害者友の会
会長　賀屋　幸治さん

13冊の帳簿がある。表紙には『原爆死没者名簿』と記されている。これには、亡くなられた被爆者の名前が記帳されており、毎年8月6日の平和祈念式典で奉納されているものだ。7月の初め、年に一度虫干しをした名簿を原爆慰霊碑『叫魂（きょうこん）』の台座にある収納庫に、いったん納めに来た原爆被害者友の会の賀屋幸治会長（72歳　玖波）の姿があった。

被爆者協議会から友の会へ

これまでの大竹市原爆被爆者協議会という名称を大竹市原爆被害者友の会と変えたのは、令和5年のこと。

「被爆者も高齢化して次第に減ってきました。最も多いときは、およそ2千人の会員がいましたが、現在は571人になっています。今後の活動を継承していくためにも、被爆者だけでなく犠牲となった家族や、活動に賛同し協力してくれる人も入会できるように改めました。おかげで新たに会員になってくれた人もいます」。賀屋会長は、こうして少しでも活動の輪を広げていきたいと考えている。

2600個のキャンドルで追悼

被爆80年の節目の今年、新たな試みとして8月5日に、前夜祭を企画している。それが「つなげよう！未来へ」とテーマを掲げた『平和祈念被爆80年　原爆死没者追悼イベント』である。

「この大竹の地で平和に暮らせている我々子孫も、原爆で犠牲になった先祖のおかげもあると思います。その死没者の方にも、世界で活躍しているアーティストの姿を見てもらいたいという気持ちです」。

イベントは、二階堂和美さんと三宅由利子さんが出演する音楽コンサートや、被爆体験記と詩の朗読会、そしてクライマックスは、『叫魂』の前面道路に、死没者の数である約2600個の紙コップにLEDライトを入れたキャンドルをともすというもの。

「紙コップには、市内の小・中・高校生たちがイラストやメッセージを書いてくれます。それを大竹高校の生徒も一緒になって並べていこうと思っています。いずれはこの子らも大竹を離れるかもしれません。それでも、こうした活動に一緒に携わった経験が、もしかしたら平和活動につながってくれるのではないかと考えています」。そんなふうに賀屋会長は期待を寄せているようだ。

『叫魂』の像の前で行う意味

賀屋会長が名簿を納めた『叫魂』の像。彫刻家三上良平さんの作品である。

「この像から出てくるオーラがある。これだけの力作をぜひ見てほしいし、大竹の宝として、象徴として残していきたい。イベントをこの場で行うことに意味があるのです」。

原爆への怒りと悲しみを表わしたような叫びの像。そこに追悼の明かりをともすという意味。立派なひげをたくわえた賀屋会長の目は、「つなげよう！未来へ」と語っているようだった。

昭和20年8月6日、大竹市域から千人もの犠牲者を出した。その後、入市被爆した人々が数多くいる。亡くなった方たちの名前が毎年記されていき、13冊の名簿となっている。

平和祈念被爆80年
原爆死没者追悼イベント
「つなげよう！未来へ」

問い合わせ
原爆被害者友の会（賀屋宅）
☎57-3388

とき
8月5日㈫18時～20時30分
（入場　17時30分から）

ところ　総合市民会館2階ホール

司会
一柳信行さん（RCCアナウンサー）

【第1部】音楽コンサート
二階堂和美さん・黒瀬みどりさん
三宅由利子さん

【第2部】大竹の被爆体験記朗読会

【第3部】
○原爆死没者追悼キャンドル点灯
※雨天の場合、総合体育館に変更
○2階研修室
『原爆の子』DVD上映（無料）
第1回　13時～　第2回15時～

8月6日の平和祈念式典では、恒久平和を願う参列者の『青い空は』の歌声が響く。

父と娘で朗読劇
実の親子でやることの意義。

三宅　信之さん
三宅　ケイコさん

井上ひさしさんの戯曲に『父と暮せば』という被爆後の広島を舞台にした作品がある。被爆死した父の竹造が幻となって娘の美津江の前に現れ、二人の会話で物語が進むというもの。

この作品を実の父と娘が朗読劇として、8月6日に玖波公民館で披露する。朗読に挑むのは、三宅信之さん（71歳　黒川）と、娘の三宅由利子さん。由利子さんは、ニューヨーク在住の表現師としてダンスや歌などのパフォーマンスで活躍し、『大好き大竹応援大使』も務めている。

娘に誘われ朗読劇に挑戦

あるとき、由利子さんが部屋の片づけをしていたところ、ゴトッと落ちてきた本があり、それが『父と暮せば』だったという。帰国したときに、「こういう戯曲があるけれど実の親子が演じるのはないらしいので、やってみない？」と誘われたのがきっかけだと信之さんは回想する。

「母親が被爆者でした。ならば自分は被爆二世、娘は三世。被爆の語り部ほどではないけれど、あの日に広島ではこんなことがいっぱいあったと思うと、こうしたことをやるのも当たり前だよねという気持ちになってきました。台本があるし、おまけにせりふは広島弁だからできるじゃろう」と腹を決めたそうだ。

しかし、芝居の経験は皆無の信之さん、自分が舞台に上がってなどということは、さらさら思ったことはなかった。

「対話劇なので、間の取り方や、読み間違いに気をつけました。昔の広島弁なので、普段私らが使わない言葉が出てきたりもします。通しでやってみて、娘から指摘を受けて、やり直したり。通し稽古も何度もしましたよ」。信之さんの言葉の端々から苦心の跡がうかがえるようだ。

やってよかった、やらなきゃいけない

令和3年8月6日、いよいよ朗読劇の発表のときが訪れた。このときは、信之さんは自宅から、由利子さんは平和記念公園内の広島国際会議場の一室から、インターネット配信で、その成果を披露した。ラストは由利子さんが部屋から出て、公園内の慰霊碑からの中継で幕を閉じた。

「やってよかった。やらなきゃいけないと思いました」。信之さんはやり切った気持ちでぐったりしたと言いつつも充実した表情を見せてくれた。

実は、今回の玖波公民館での再演の前に、7月22日、23日には、ニューヨークで朗読劇をすることになっている。その際に、場面の状況などを説明するト書きは、信之さんの妻のケイコさん（71歳）が読む。

「こうした取り組みは、娘のライフワークの一つとして、広島だけでなくいろいろな場所で続けていきたいと言っています。学校などでも機会があればできるんじゃないですかね」。ケイコさんはそう話す。

この朗読劇で伝えたいことを信之さんは次のように語る。

「親子の愛情の深さを感じてほしいと思います。親子のつらい別れというのは、二度とあってはならない。原爆というものがなければ、それぞれの家庭で人生を送れただろうに…。今回の朗読劇は、実の親子でやることに意義があると思うし、この取り組みをこれからも続けていけたらという気持ちもあります。だから玖波公民館でしっかりやらにゃいけんね。まずは地元で」。信之さんは、8月6日に向けての決意を表わしてくれた。

『父と暮せば』朗読の旅
8月6日㈬13時30分～15時（13時開場）
玖波公民館（☎57-7084）

おわびと訂正
7月号に掲載したこのイベントの出演者の名前が間違っていました。訂正しておわびいたします。
（正）森永明日夏さん（誤）森永明日香さん

命を大切にしたいと思った。

―広島平和記念資料館を見学して―

小方中学校1年生

容赦なく太陽が降り注ぎ、蒸し暑い7月4日、平和学習で小方中学校1年生93人が、平和記念公園を訪れた。この日、小方中の生徒のほかにも、見学の小中学生の姿が数多く見られた。また、近年は海外からの訪問客も多く、随所でその姿を目にすることができる。

一瞬でこんなことに

最初に生徒たちは平和記念資料館に入館し、2階の展示室に向かう。エスカレーターで上がったエントランスには、現在平和記念公園となっている被爆前の町の巨大な写真が目を引く。多くの家並みが、かつては人々の暮らしの営みがあったことを物語る。

展示室に足を踏み入れると、被爆後の荒涼とした壁一面のパノラマ写真に圧倒される。そして、原子爆弾が投下され、一瞬にして廃墟となった町並みをCGで再現した映像が、円形のプロジェクターに映し出されると、生徒たちは身を乗り出すようにして見入っていた。

続く展示室には、ボロボロとなった衣服や、ぐにゃりと曲がった鉄骨などの実物、被爆で大やけどをした人々の痛ましい写真、被爆者が自ら描いた惨状を伝える絵画の数々。地獄のような苦しみをそれでも後世に伝えようとする姿に心打たれる。生徒たちも熱心にメモを取っている。

見学を終えた生徒たちは「遺書やボロボロの服が印象に残った」「戦争のつらさを感じた」「一瞬でこんなことになるんだと思った」などと感想をもらしてくれ、「今日見学した原爆のことを家族にも話してみようと思う」とも言っていた。

被爆証言を聞く

午後は、被爆体験証言者の廣中正樹さんの体験談に耳を傾けた。5歳10カ月で原爆を目撃、被爆した父親を亡くした経験を持っている廣中さんは、原爆の非道さと平和への願いを訴えている。

見学を終えた一人は「私たちが次の世代に、戦争はいけないこと、原爆の怖さ、平和の大切さを伝えていきたい。自分は一日一日を大切に生きて、命をもっと大切にしたいと思った」。そう語ってくれた。

折り鶴を掲げた原爆の子の像に集合した生徒たちは、そこにある鐘を打ち鳴らした。鐘の音が高らかに公園に響きわたった。

悪夢の一日を伝える。

被爆体験証言者　廣中　正樹さん

廣中さんは被爆体験を歌に込めCD化している。

わずか5歳と10カ月。幼な心に深く刻まれた傷。朝、いつものように仕事に向かう父親を見送ったその日、悪夢の一日が始まるとは、夢想だにしなかっただろう。

廣中正樹さん（85歳　福山市）は、公益財団法人広島平和文化センター被爆体験証言者として令和4年から、自身が体験した「あの日」のことを伝える活動をしている。この日も小方中1年生を前に語り始めた。

プロジェクターから映し出されるのは、自身がノートに描いた「あの日」の出来事。通勤中の市内電車で被爆した父親との最後の別れを切々と語る。その父親が末期の床で敷いていた枕は、平和記念資料館に展示してある。

「子どもたちが、話に感動してくれる姿にやりがいを感じている」。体験談を終えてそう話してくれた。

衝撃的な体験を昨日のことのように語る廣中さんだった。

叫びにも嘆きの表情にも見えるような原爆ドーム。

忘れないあの日の広島を

―父子の別れ・親子の想い―

作詞　廣中正樹・向井じゅん
作曲・編曲　向井じゅん

河辺の水は生ぬるく　山の色は熱をあび
聞こえる声は「お水が飲みたい」
何が起こっているのだろう
ピカッと光ってきのこ雲　8月6日の朝でした
真っ青な空がオレンジ色に　黒い雨降る黒い空
水車の音がコットン　コットン　風が渦巻く街中に
父さんと歩いたあぜ道も　水車の音だけ鳴り響く

真夏の広島焼け野原　がれきの山をかき分けて
聞こえる声は「お水が飲みたい」
何が起こっているのだろう
8月6日の夜でした　父さん電車で被爆して
背中に刺さったガラスの破片　取り除くことは無理でした
水車の音がコットン　コットン　悲しく響く蝉の声
父さんの温もり忘れない　家族に会えた喜びに
感謝

「ありがとう」母さん　「がんばるよ」父さん
生まれ育ったこの町　己斐　手と手をつなぐ親子愛

平和を祈る折り鶴　平和を願う広島
ともに生きよう　忘れないあの日の広島を

平和を祈る折り鶴　平和を願う広島
ともに生きよう　忘れないあの日の広島を

式典参列者に気持ちが伝わるように。

―平和祈念式典で平和の歌演奏―

小方中学校吹奏楽部

8月6日に総合市民会館で行われる平和祈念式典で、小方中学校の吹奏楽部が演奏するのは『ひろしま平和の歌』という曲。例年式典で演奏を担っているのは、大竹中と小方中の吹奏楽部で、それぞれ隔年で演奏をしており、今年は小方中が務める。

この曲は、戦後間もない昭和22年8月に開催された『平和祭』に向けて主催団体の広島平和協会が歌詞を一般公募。重園贇雄（しげぞのよしお）氏の作品が選ばれ、山本秀（みのる）氏が曲をつけたものである。厳かな式典にふさわしい平和を希求する賛歌となっている。

放課後の小方中の音楽室では、7月末のコンクールに向けて練習に余念がない。トロンボーンを担当している部長の迎（むかえ）ひなのさん（3年）は、1年生のときにも式典で演奏を経験している。当時は楽器を始めて間もないころで、難しかった記憶があるという。今年、改めて演奏に臨むにあたって「ただ演奏をしているだけじゃなく、参列者に気持ちが伝わるように演奏したい」。そう思いを込めて話す。

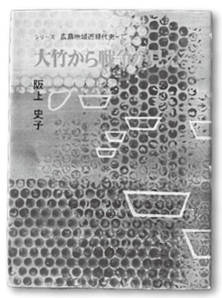
平和な世界を築くため、まずは「周りの人と争わず、何事も話し合いで解決していきたい」。それが自分なりにできることだと考える迎さん。

8月6日の式典には、そうした思いが音となって届くことだろう。

（左）部長の迎さん。試しに吹いてみたトロンボーンが一番自分に合っていたので選んだという（下）顧問の先生のタクトに合わせコンクール課題曲の練習。

つづられた鎮魂の言の葉

広島は数多くの原爆に関する本が出版されている。
その中でも大竹市にゆかりのある本に注目してみた。
また、これまで広報紙には、原爆や戦争に関する記事を掲載してきた。



『大竹から戦争が見える』
阪上史子（ひろしま女性学研究所）

大竹市内の企業の社宅で育ち、長じて関西に移り住んだ著者が、ふるさとの思い出や戦争との関わりを調べて一冊にまとめた。

すぐに救援に大勢が行った。握り飯持って。次の日くらいから猫車にけが人を載せてどんどん運ばれてきた。次々と死んでね。そりゃかわいそうだった。悲惨だったよ。あの頃は車がなかったからそうやって歩いて運んだ。

『叫魂から永遠平和へ ―大竹市の歴史・産業・地域文化』
天瀬裕康（コールサック社）

大竹市で開業医として医療に携わってきた著者が、大竹の文化や平和について思うことを叙事詩の形式でつづった詩集。

仁王様のような父が怒りの声を上げ　天を睨み
地蔵様に似た子が父の足に縋りついて　天を仰いでいる
被爆者の怒りと永遠の平和を
象徴的に表すような父子像

『綾瀬はるか「戦争」を聞くⅡ』
TBSテレビ『NEWS23』取材班（岩波ジュニア新書）

戦争体験をした人たちを綾瀬はるかが訪ねて歩くニュース番組の書籍化。大竹市にも訪れ、被爆体験を聞く。

あんたはどうして生きているのか。うちの子は死んだ。あんたはどうやって生きているのか。どうやって助かったのか。

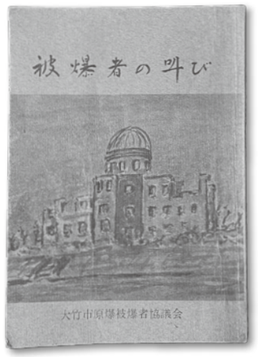
『八月の青い蝶』
周防 柳（集英社）

陸軍軍人の子として広島市で生まれた主人公亮輔。少年時代に被爆し、戦後は事業を起こし生き抜いてきた。昭和20年の夏、亮輔の秘めた恋心を一発の爆弾が打ち砕く。人生の終わりが近づいてきた父亮輔を見つめる娘の視点と、少年時代の出来事とが交錯する物語。作中、「広島県の西端にあるOというこの町に里帰りしたのだが…」など、大竹市と思われる記述がある。

周防 柳（すおう やなぎ）

1964年生まれ。５歳から小学３年生まで大竹市で過ごす。高校卒業までは岩国市。本作は2013年『第26回小説すばる新人賞』、2015年『広島本大賞』受賞。著書に『逢坂の六人』『蘇我の娘の古事記』『小説で読みとく古代史』『恋する女帝』など

このわしのいったいどこが悪かったですか。わしはどんな悪さをして、なんのバチが当たったですか。わしはどんな悪さをして、爆弾に吹っ飛ばされたですか。



『被爆者の叫び』
大竹市原爆被爆者協議会

被爆33年に市内の被爆者29人の体験をまとめた冊子。国民義勇隊として建物疎開の動員で広島市内で被爆した人、勤務先で被爆した人、救援活動に向かった人。それぞれが目撃した凄絶（せいぜつ）な光景が生々しく記されている。今となっては貴重な証言集。

水、水、水が慾しい、誰も水を呉れない、先刻迄一緒にいた誰彼の安否を尋ね、（既にそこの側で死んでおられる義勇隊の人の名前）、もう自分は駄目だ！
みんな元気だとうそを云い元気を出す様励ましたけど…
水も与えた、しかしもう何も分からないため一本の強心剤をしただけ…
安心したのかアッと云う間に息絶えて仕舞って悲しい最後だった。
父は私達が行く迄頑張って待っていたのだ。

玖波小の原爆句碑

玖波で医師をしていた矢野ミチ子さんが、被爆した父親を捜し当て、最期をみとったときのことを証言集に寄せたもの。

その父親をしのんで詠んだ俳句を刻んだ句碑が、今も玖波小学校の校庭にある。

父の墓水たっぷりと原爆忌

※原爆忌　歳時記では広島は夏の季語、長崎は秋の季語となっている。

原爆・戦争を紙面に留めた『広報おおたけ』

これらの広報紙は、市立図書館で閲覧できます。

平成15（2003）年８月号
ヒロシマ語り継ぐ「あの日」。

市原爆被爆者協議会の岩部守邦会長を始め、被爆の「語り部」の声を掲載した。ほかにも総合市民会館前の『叫魂』像の作者、三上良平さんに制作の思いを聞いた。

平成17（2005）年８月号
風化させない「記憶」。

大竹市出身で元教師の児玉辰春さんが、被爆死した息子の母親の話をもとに著した『まっ黒なおべんとう』や、そのほかの著作の創作秘話。絵本『まっ黒なおべんとう』の絵を描いた長澤靖さんの話を掲載した。

平成17（2005）年11月号
私たちのまちに戦争の歴史があった。

かつて海兵団や潜水学校があり、戦後は引き揚げ港として帰国の窓口となった大竹のまち。その歴史をひも解くとともに、戦後60年の『メモリアルイベント』に携わる人の話を聞いた。

平成26（2014）年８月号
記憶の跡 大竹と原爆

８月６日、建物疎開の作業のため、大竹市域から国民義勇隊や動員学徒が、広島市内に向かい千人もの人が犠牲となった。当時の惨状を目の当たりにした人たちの証言を聞き、特集記事とした。

令和２（2020年）８月号
ピカドンの爪痕を今に伝える。

大竹市出身の地質学者で、平和記念資料館の初代館長である長岡省吾さんが、被爆の実相を伝えるために、熱線を浴びた石や瓦などを多数収集していく生き様を紹介。その長岡さんのことを戯曲化した天瀬裕康さんの思いを聞いた。

被爆80年『平和へのおもい』開催

8月6日㈬▶9月4日㈭（閉館時を除く）
総合市民会館ロビー

問い合わせ　企画財政課　☎59-2125

ミニミニ原爆展をはじめ平和に関する資料などを展示します。核兵器、そして戦争は私たちのささやかな日常を一瞬で奪います。この機会に今一度「平和」の意味を考えてみませんか。

内　容
・原爆関連のパネル写真などの展示
・市内児童生徒が作成した平和ポスターの展示
・大竹港海外引き揚げの記録DVD上映
・大竹海兵団に関する資料の展示
・原爆・戦争・平和に関する図書の紹介　ほか
※平和祈念式典後にお立ち寄りください。

原爆の日・終戦記念日に黙とうを

今年は８月６日に広島市、８月９日に長崎市に原爆が投下されて80年です。また、８月15日の終戦記念日には、東京で全国戦没者追悼式が行われます。原爆や戦争で死没された人々の冥福と世界の恒久平和を祈って、サイレンに合わせて1分間の黙とうをささげましょう。

原爆の日、終戦記念日には、防災行政無線でサイレンを鳴らします。

原爆の日
○広島市　８月６日㈬　８時15分
○長崎市　８月９日㈯　11時２分
終戦記念日　８月15日㈮　12時

「大竹のヒロシマの日」

大竹市原爆死没者追悼・平和祈念式典

8月6日㈬　8時▶9時
原爆慰霊碑「叫魂」前（総合市民会館）

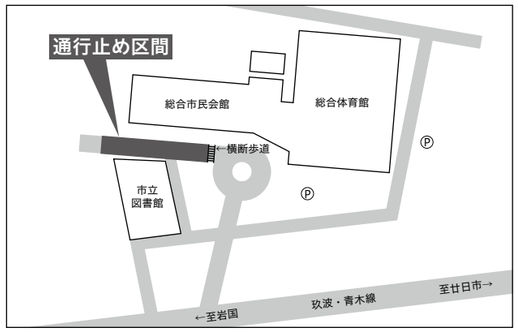
問い合わせ　原爆被害者友の会（賀屋宅）　☎57-3388

多くの犠牲者、被爆者を出した大竹市。「大竹のヒロシマの日」として平和祈念式典を開催します。
※熱中症対策のため、上着着用は不要です。

通行止めのお知らせ

８月５日㈫の『被爆80年原爆死没者追悼イベント』、６日㈬の『平和祈念式典』中は、敷地内で一部が通行止めになります。

通行止め箇所　原爆慰霊碑「叫魂」周辺車道
通行止め時間
８月５日㈫15時～21時
８月６日㈬６時30分～９時30分
※時間は前後する場合があります。



広島平和記念公園内の新しい施設

被爆遺構展示館（令和４年開館）

平和記念公園一帯は、被爆前には民家や商店などが建ち並ぶ繁華街だった。被爆後の公園整備により埋もれていた建物などの基礎などを発掘し、保存、展示している。展示館に続く舗道は、被爆前の町にあった実際の道路の幅員や位置を再現している。

G7広島サミット記念館（令和６年開館）

令和５（2023）年５月19日から21日に開催されたG7広島サミットを記念して開館した施設。被爆地で初めて開催されたサミットは、各国の首脳などが、平和への願いを込めたメッセージを残した。館内には会議で使用された円卓や椅子なども展示している。

【開館時間】○被爆遺構展示館：3月～11月/8時30分～19時、8月/8時30分～20時（8月5日、6日は21時まで）、12月～2月/8時30分～18時○G7広島サミット記念館：3月～11月/7時30分～19時、8月/7時30分～20時（8月5日、6日は21時まで）、12月～2月/7時30分～18時

伝える花

作詞・作曲　二階堂和美

何も失くなった
全て消えてしまった
あの日　青空は
どんな顔をしてた

70年は草も木も
生きられぬと言われた
この土にたったひと月で
ほら　花が咲いた

生きる力　流れる川
わたしたちは　生きてる
伝える花　寄り添う花
ほほえみを咲かせて

受けた悲しみは
決して返しはしない
見上げる青空は
今　こんなに晴れてる

いくつもの虹を数えて
わたしたちは今
この土に眠る幾億の
願い　つないでゆく

生きる力　流れる川
わたしたちは　生きてる
伝える花　育てる花
ほほえみを咲かせて

生きる力　流れる川
わたしたちは　生きてる
伝える花　寄り添う花
ほほえみを咲かせて

いまだ世界には戦争・紛争が絶えない。私たちにできることは、こうした現在、過去を知り未来への責任を担うことだと、各人への取材から感じた。

被爆１カ月後の爆心地に近い基町で撮影された『焦土に咲いたカンナ』の写真に触発されてできた『伝える花』。現在その写真は、平和記念資料館の地下１階に展示してある。

元安川左岸（大手町側）の遊歩道にあるカンナ花壇。

『伝える花』の動画や楽譜はこちらから。